



中学校道徳科における「感動，畏敬の念」の授業：
「人間の力を超えたもの」をどのように扱うか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 真由美, 杉本, 泰範, 山田, 浩之, 小路, 美和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006901

中学校道徳科における「感動，畏敬の念」の授業

—「人間の力を超えたもの」をどのように扱うか—

山田真由美・杉本 泰範*・山田 浩之*・小路 美和*

北海道教育大学札幌校道徳教育研究室

*北海道教育大学附属札幌中学校

A Study of Moral Education Class for Developing a Sense of Reverence

YAMADA Mayumi, SUGIMOTO Yasunori*, YAMADA Hiroyuki* and KOJI Miwa*

Department of Moral Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

*Sapporo Junior High School Attached to Hokkaido University of Education

概 要

道徳の「特別の教科」化にともない、中学校学習指導要領に示される「自然愛護」と「感動，畏敬の念」が、新たに別々の内容項目として区分された。このことは、「自然愛護」と「畏敬の念」を同項目とし、感動や畏敬の対象を主として自然に認めてきたこれまでの道徳教育にとって、大きな改訂であると考えられる。改訂後の道徳授業では、自然の荘厳さや神秘性に限らず、人の生き方や気高さ、人間として生きることそのものを通して「人間の力を超えたもの」を感じ取り、それに対する「畏敬の念」を育てる実践が求められることになるのである。本論文は、同項目をめぐるこのたびの改訂を重く受け止めたうえで、「感動，畏敬の念」を育てる授業のあり方について考察し、本学附属中学校での実践を通してその成果を検証した。

1 はじめに

道徳の時間の「特別の教科」化にともない、道徳教育は「考え，議論する道徳」の実現に向けて大きな転換期を迎えている。中央教育審議会による2014年の答申「道徳に係る教育課程の改善等について」以来、価値の教え込みや心情の読み取りを目的とした道徳授業のあり方はことごとく否定され、道徳科の授業では、「自己を見つめ、物事

を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」が行われるよう、その目標が大きく書き換えられた¹。答申によれば、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にある」のであって、今度の道徳科では、むしろ「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問

題を考え続ける姿勢」を養うことが重要であると述べられる²。こうして提案された「考え、議論する道徳」の理念はすでに広く受け入れられ、現在まで多くの論者が「主体的、対話的な」道徳授業のあり方を積極的に提案している。

しかしながら、方法に関する議論が蓄積される一方で、道徳教育の内容をめぐる改訂については、今日までさほど議論が起こっていないようである。目標の改訂にともない一新すると思われた内容項目は、改訂後も従来の学習指導要領と大差なく、提示の形式をめぐる若干の変更を除いては、特別な改訂は加えられなかった³。

こうしたなかで本論文が着目するのは、このたびの改訂で一部変更のあった、内容項目D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の(2)「感動、畏敬の念」(美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること)の取り扱いについてである。現在までさほど注目されていないが、改訂以前の要領では、同項目は3「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」の(2)「自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」として示されていた。しかし、今回の改訂にともなってこの項目は二つの項目として新たに区分され、同じくDの(20)「自然愛護」(自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること)と、上述の(2)「感動、畏敬の念」に、分割して示されたのである⁴。

「自然の崇高さを知り、進んで自然の愛護に努めること」と、「美しいものや気高いものに感動する心をもつこと」が指導内容として区別されたことは、これからの道徳教育にとって大きな改訂であるように思う。従前の項目では、「自然愛護」と「畏敬の念」が同時に示されていたために、「自然の美しさに触れる」ことや「自然の生命を感じ取る」ことを通して、「人間の力を超えたもの」を感じ取るような学習がねらいとされてきた⁵。しかし、今回の改訂で両項目が区別されたことに

より、生徒に感動や畏敬を感じさせる「美しいものや気高いもの」の範囲は、従来の自然から「人の生き方」にまで広げられたのである。とすれば、こうした改訂は決して小さなものではなく、同項目を扱う授業のあり方そのものを大きく変えていくことが予想される。改訂によって畏敬の対象が広げられたとするならば、これからの授業はどのような学習をねらいとしたらよいのだろうか。

以上の背景から本稿は、同項目をめぐるこのたびの改訂を重く受け止めたうえで、人間の生き方そのものを通して「感動、畏敬の念」を育てる授業のあり方について考察し、本学附属中学校での検証を行うことを試みる。以下、まずは同項目が目指すべき学習内容を、新旧の学習指導要領解説をもとに検討し、実践に向けた学習案作成の手掛かりとする。

2 内容項目「感動、畏敬の念」の解題

2.1 学習指導要領解説

改訂後の内容項目Dの(20)「自然愛護」、(2)「感動、畏敬の念」に示された文言は、それぞれ「自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること」、および「美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」である。先述したように、改訂前に「畏敬の念」を示した3の(2)には「自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」と示されており、同項目の学習では「自然の生命を感じ取り、自然との心のつながりを見いだして」いくことや、「自然のなかで生かされていることを自覚すること」などが重視されていた⁶。対して改訂後の解説は、「感動、畏敬の念」に関する概要を次のように記述する。

人は、長い年月の間存続してきたり、人が育んできた自然の美しさや、優れた芸術作品や芸術家の技に触れることによって、自らの

人生を豊かで味わい深いものにしてきた面もある。さらに、人間のもつ心の崇高さや偉大さに感動したり、真理を求め、自分の可能性にひたむきに挑戦する人間の姿に心を打たれたりすることがある。(中略)このような自然や芸術、人の生き方など、美しいものや気高いものに触れることによって、人は感動を味わい、人生をより豊かなものとする事ができる。⁷

着目すべき点としては、従来と同じく「自然の美しさや優れた芸術作品」に対する感動に加えて、「人間のもつ心の崇高さや偉大さ」、「真理を求め、自分の可能性にひたむきに挑戦する人間の姿」といった「人の生き方」や「気高いもの」に関する記述が示されたことである。

解説によれば、上の「気高さ」というのは、「品格ある人の生き方の中に感じ取られるもの」であるという。つまり、今回の改訂にともなって「感動、畏敬の念」という項目は、「自然の美しさ」に感動することを通して「生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心を生み出すこと」にとどまらず、同じく人間として生きる人びとの「生き方の中」に感じられる「品格」や「清らかさ」を、その学習内容として含み込むよう書き換えられたのである。このことは、今後の道徳科授業で「感動、畏敬の念」を取り扱うにあたって十分に自覚すべき、重要な変更点であると考えられる。

しかし一方で「指導の要点」を見ると、学習内容としては「自然の織りなす美しい風景や優れた芸術作品等の美しいものとの出会いを振り返る」ことが例として明記され、「そこでの感動や畏怖の念、不思議に思ったことなどの体験を生かして、人間と自然、あるいは美しいものとの関わりを多面的・多角的に捉えさせることが大切である」といった、従来通りの記述が維持される⁸。

後段の「人の生き方」に関しては、「心の奥深さや清らかさを描いた文学作品等の気高いものとの出会いを振り返り、有限な人間の力を超えたものを謙虚に受け止める心を育てることが求められる」との記述が加えられたが、そのことについて

具体的な言及はなく、要領上の記述自体もいまだ十分に練られていない印象を受ける⁹。人の生き方を通して「人間の力を超えたもの」を受け止めるというのはいったいどのような意味であり、そのためどのような授業展開が求められるだろうか。本論文の課題はここにある。

2.2 「よりよく生きる喜び」との関連

ここまで「感動、畏敬の念」の項目が「自然愛護」と区別され、「人間のもつ心の崇高さや偉大さ」がその指導内容として書き加えられたことを確認した。この改訂のためにより判明しがたくなったのが、同じくDに位置づけられ、人間の弱さや気高さを内容とする²²「よりよく生きる喜び」との関連についてである。

「よりよく生きる喜び」は、改訂前から視点3の(3)として立てられており、改訂後の具体的な文言は、「人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと」である¹⁰。これまでの道徳授業では、「自然愛護」と「感動、畏敬の念」が一項目にまとめられていたこともあり、自然や芸術作品を扱う場合は3の(2)の「畏敬の念」、人間の生き方を扱う場合は3の(3)の「よりよく生きる喜び」として、一定の棲み分けがなされてきたと考えられる¹¹。

しかし、今回の改訂で「人の生き方」が「感動、畏敬の念」に含み込まれたことは、もともと人間の気高い生き方や行為の美しさを内容としてきた「よりよく生きる喜び」の学習と混同する可能性があるのではないか。解説は、「よりよく生きる喜び」の概要を次のように示している。

人間は、総体として弱さはあるが、それを乗り越え、次に向かっていくところにすばらしさがある。時として様々な誘惑に負け、やすきに流れることもあるが、誰もがもつ良心によって悩み、苦しみ、良心の責めと戦いながら、呵責に耐えきれない自分の存在を深く意識するようになる。こうした苦しみに打ち勝って、恥

とは何か、誇りとは何かを知り、自分に誇りをもつことができたとき、人間として生きる喜びに気付くことができる。そして、人間として生きることへの喜びや人間の行為の美しさに気付いたとき、人間は強く、また、気高い存在になり得るのである。¹²

本稿にとって重要なのは、「感動、畏敬の念」で示された記述との差異である。解説の記述からは、「よりよく生きる喜び」の項目に示される人間の弱さや気高さが、あくまで生徒が自分自身の生き方を内省するための手助けとして、自分も「崇高な人生を送りたい」と考えられるような授業が想定されていることがわかる。指導の要点を見ても、「自分を奮い立たせることで目指す生き方や誇りある生き方に近付けるといふことに目を向けられるようにする必要がある」といった記述があり、こちらの項目ではやはり生徒が現在の自分自身を振り返り、自分の人生を見つめることに、指導の重点が置かれている¹³。つまり「よりよく生きる喜び」の項目では、生徒の思考が現実生きる自己自身を超えていくところまでは求めていないのであって、「感動、畏敬の念」との差異は、人の生き方を通して「人間の力を超えたものを素直に感じとる心」に向かうことができるかどうか、という点にあると考えられる。

そして先に「自然愛護」との関連を確認したように、今回の改訂を通しては、この「人間の力を超えたもの」というのが、自然や芸術作品との対比においてのみではなく、人間としての生き方そのものに見いだされるものとして、新たに提案されたのである。ここまでの議論の結論としては、人間の心の奥深さや清らかさ、人の生き方の気高さや美しさを振り返ることで、生徒が「人間の有限性」および「人間の力を超えたもの」を感じ取り、謙虚にそれを受け止める営みこそ、改訂後の「感動、畏敬の念」が新たにねらいとする学習内容であるといふことができる¹⁴。

2.3 「人間の力を超えたもの」をどのように実感させるか

さて、このたび新たに項目化された「感動、畏敬の念」の学習内容について、ここまで明らかにしたのは次の二点である。第一に、感動や畏敬の対象が、これまでのような自然や芸術作品に限らない、その作り手や人の生き方という人間に向かう視点を含み込んだことであり、第二に、同項目が対象とする人間の気高さや生き方は、「よりよく生きる喜び」の場合とは異なって、それを通して「有限な人間の力を超えたもの」を感じ取ることができるような学習が想定されていることである。つまり、生徒が自分自身の現実的な生き方を振り返る活動からさらに踏み込んで、人間がただ人間の力だけで生きているのではなく、何か人間を超えた大いなる力や神秘さ、不可思議とともに生きていることを感じ、気づかせるような学習が求められているのである¹⁵。

一方、学校における道徳教育は特定の宗教とのかかわりを否定しており、大いなる力や神秘さを感じさせる活動がどのようにして行われるべきかについては、これからの具体的な提案や吟味が俟たれるところである。本稿はそのための第一歩として、ここまで学習指導要領をもとに見てきた指導のあり方をもとに、ひとまず学習案の作成を行なうこととする。課題となるのは、第一に、自然との対比からではなくて、人間が人間として生きることに對して「人間の力を超えたもの」を感じ取る手立てを準備することであり、第二に、それが終始「生きることの有限性」を発見することにとどまり、特定の宗教や特定の生き方の賞賛にはつながらないようにすることである。

3 教材の選定と授業の構成

3.1 教材の選択および教材研究

学習案の作成にあたってまず課題となったのは、上述の意味での「畏敬の念」を生徒が実感できるような教材を選定することである。今年度より導入された教科用図書(札幌市採択の東京書籍)

では、すべての学年で従来と変わらず自然を題材とした読み物が採用されていたため、人間の生き方そのものを通して「人間の力を超えたもの」を感じ取るためには、何らかの教材を別途準備する必要があると考えた¹⁶。そこで目をつけたのが、共著者のひとりがかねてから国際協力に関する教材として活用してきた、坂本達氏によるノンフィクション著作『やった。』と『ほった。』（三起商行）の二冊である¹⁷。

同書は、著者である坂本氏が四年三カ月にわたって自転車で世界中を旅した「自転車世界一周の旅」の経験を記述した記録である。自転車一台で5万5000キロを横断するという過酷な試練を自らに与えた著者は、繰り返し命の危険にさらされながらも、世界中でさまざまな人や自然に出会い、旅を通して彼らの人生と向き合うことで、人間がたがいに愛し愛され、生かし生かされているという「いま生きていることの奇跡」を体験する。

なかでも「感動、畏敬の念」としての展開が可能と思われたのは、著者である坂本氏自身が、自らの旅の途上に、ひとつひとつの出会いや出来事を「運命的につながり合っている何か」＝「サムシング・グレート（大いなる意志）」を感じ取り、その後の人生哲学として追求している点であった。そのため本実践では、坂本氏が感じた「サムシング・グレート」を象徴する二つのエピソードを抜粋し、これを中心的な教材として活用することにした。一つ目は、氏が四年にわたる世界一周の最後の大陸として訪れた、南米（チリ・アンデルセン）でのエピソードである（資料①）。授業では、「人間の力を超えたもの」に対する認識を共有するために、生死をさまよう絶望から救われた坂本氏が綴った、次の記述に特に注目することにした。

改めて不思議だったのが、「なぜ必要なタイミングで、必要な助けが現れるのか」ということだ。たまたま通りがかかった州知事は、僕が倒れた前日でも翌日でもなく、あの日あの時に通ってくれた。サルタでは、「しばらく人に会

わず、ずっと寝ていたい」と思っていた僕に、家族同様に接してくれる人を紹介してもらえた。「ひとりでは何もできない」と実感すると同時に、何かひとつひとつの出会いや出来事をつなぎ合わせてくれている気がしてならなかった¹⁸。

二つ目のエピソードは、旅をはじめて半年頃の、アフリカ大陸（ギニア・カリヤ村）でのシェリフ医師との経験である（資料②）。ここでもまた、生死の狭間においてシェリフの人格に圧倒され、再び生きることを果たした坂本氏の、運命的なものに対する視座が記述されている。

八日目、不足している薬を分けてもらい、最後の洗濯も済ませ、出発の準備をする。（略）

九日目、いよいよ出発だ。

僕はペダルをこぎ続けた。そして、強く思った。

「人間は生きているのではない。生かされているのだ」と¹⁹。

二つのエピソードに共通するのは、旅の途上で生命の危機に直面した坂本氏が、生きていることの奇跡をまさしく「人間の力を超えたもの」において実感する点である。第一のエピソードにおける「何かひとつひとつの出会いや出来事をつなぎ合わせてくれている気がしてならなかった」という記述や、また第二のエピソードでの「人間は生きているのではない。生かされているのだ」という力強い言葉は、そのことを十分に表している。生命の危機を経験し、物の豊かさではなく、心の豊かさを大切に生きている人びとに出会うなかで、坂本氏が直面した「生かされている」との思いを追体験することは、彼が行動原理とする「サムシング・グレート」に共感し、「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」を感じる有効な手立てになると考えた。

3.2 「畏敬の念」を学習する手立て

しかし、現代を生きる子どもにとって、自転車

で世界を一周する坂本氏の行為はきわめて非日常的な体験であり、また日本とはかけ離れた環境で生死をさまよう経験や、自然の驚異を想像することは困難であると予想された。授業を行う2年C組は、明るく穏やかな生徒が多く、仲間同士で協力して助け合う姿勢が強く見られる学級である一方、塾や習い事に日々を追われ、忙しく生活している生徒が多いのも事実である。SNSやスマートフォンをあたりまえに活用し、不自由のない生活を送る生徒にとって、南米やアフリカ大陸での過酷な生活や、貧しくも謙虚に生を営む人びとの生活をイメージすることは難しい。坂本氏が経験した偶然や奇跡を自分事として追体験し「人間の力を超えたもの」に対する認識を深めるには、まずは題材に対する生徒のイメージを膨らませ、議論を生み出しやすい環境を整える必要はないか。議論を重ねた結果、まずは坂本氏の旅を十分に想像できるよう、動画や地図など視覚的な教材を効果的に活用し、旅の情景や出来事を整理する活動を取り入れることにした。

さらに課題となったのは、氏によって語られる人びとの行為や思いを共有したうえで、そうした個別の行為を超越する「サムシング・グレート」を認識するための効果的な手立てについてである。たとえば、資料①で生死をさまよう坂本氏を救った州知事、民宿の家族、街の少年や、また資料②でマラリアに罹患した氏を治療するシェリフ医師など、それぞれの登場人物の行為に着眼した場合、授業で扱う内容項目は「感動、畏敬の念」であるよりも、むしろ「思いやり、感謝」や「友情、信頼」、「公正、公平、社会正義」が適切のように思われた。坂本氏自身の記述を見ても、彼はすべての出会いや出来事をあらためて振り返ったときに、はじめてそれをつなぎ合わせる「サムシング・グレート」を感じ取っているのであって、まずはひとつひとつの出会いや人びとの行為を突き動かす「思いやり」や「公德心」などの道徳的価値を十分に実感することが、それらをつなぎ合わせる「何か」に対して「畏敬の念」を感じるための必須条件になると考えた。

こうした背景から本実践は、従来は教材を一単位時間ごとに切り替えてきた道徳科の授業をあえて二時間続きで構成し、第一時間目には坂本氏が出会った人びとの行為を通して「親切、思いやり」について考えることを、第二時間目にはこうした出会いのすべてをつなぎ合わせる「何か」に対して「感動、畏敬の念」を感じることを、それぞれねらいとして設定することにした（文末の学習案Ⅰ、Ⅱを参照）。次節では、作成した学習案をもとに実際に授業を実践し、その成果と課題を検証することにする。

4 授業の実践と省察

4.1 第一時間目「親切・思いやり」

第一時間目は主題を「親切、思いやり」に設定し、坂本氏が為しとげた自転車世界一周の旅を想像しながら、それを支えた人びとの無償の人間愛や、他者を思いやる気持ちの尊さを見つめることを主なねらいとした。生徒にとって身近な話ではない坂本氏の経験を追体験できるように、氏の活動を紹介した動画を準備し、また過酷な環境での旅を想像できるように、文献に挿入される複数枚の写真を拡大コピーして提示した。



坂本氏の紹介にともなって、生徒からは「信じられない」、「すごい」、「なんで」、「普通では考えられない」といった率直な感想が聞かれたが、自転車での旅に予想される困難を聞いたところ、「人種差別」や「言語の壁」、「自然災害」や「病気の

危険」といった発言があった。複数の視聴覚教材を準備したことにより、生徒は坂本氏の旅の実態を一定程度想像することができたと思われた。

教材に関しては、危険と隣り合わせの状況で異国の人びとに出会い、彼らの思いやりに驚嘆した氏の経験を想像しやすいように、上述したエピソード資料①に加えて、カメルーンでのサッカー選手との出会いをめぐるエピソードを追加で使用することにした（資料③）。食料がいつ手に入るかわからない極限の状況を十分に想像させたいので、「自分が持っている食料をあなたなら分け与えるか」と発問したところ、「分け与えない」とした生徒からは、「相手の言うことが嘘かも知れない」、「信頼できない」、「まずは自分の夢を守らなくてはならない」、「厳しい境遇の人は他にもたくさんいる」、「(自分なら)ごまかしてしまうと思う」、「自分が生きるか、他人が生きるかのどちらか」といった意見が、「分け与える」とした生徒からは、「相手の強い気持ちに心を動かされた」、「助け合わなくては生きられない」、「一日分くらいはなんとかかなる」、「もう少しじっくり話をしたい」といった発言があった。「分け与える」、「分け与えない」の二択にするのではなく、自分の身に置き換えながら五段階の数値であらわすように指示したことが、多様な意見の収集につながったものと思われる（図）。こうした意見交換をしたうえで、エピソードの続き（分け与えなかった坂本氏が逆に高価な食料をもらった場面）を読み聞かせたことは、旅の登場人物たちの行動規範が自分たちの日常の常識と大きく異なることを、身をもってイメージする有効な手立てとなった。

（図）ワークシート縮図

あなたが坂本さんなら食料を				
分け与える			分け与えない	
1	2	3	4	5
(理由)				

その後、先にあげた南米大陸でのエピソード(資料①)を範読し、「坂本さんが出会った人たちは、どうしてこんなに親切になれるのだろうか」と発問した。無償の人間愛に気づかせるための発問だったが、生徒からは「助け合う精神が特別なことではないから」、「坂本さんの勇気や努力に心を動かされたから」、「助け合うことのあたたかさ、心地よさを知っているから」、「お互いのつらさを分かっているから」、「助け合うことが生きる理由だから」、「ただ助けたいから」、「〈与える〉と〈返す〉の繰り返し」といった、多様な意見が提案された。

最後に坂本氏のエピソードを振り返り、「自分自身は多くの人びとに親切にしているだろうか」と発問し、各自の「こころのおと」に記述するよう促した²⁰。生徒の記述は、「カメルーンやチリの人のような親切は自分にはできていない」という趣旨のものが大半であったが、親切をめぐる視点が「自然の恵み」にまで広がる記述や、人びとの親切心を「その場限り」や「うわべ」のものではなく、人間の生き方そのものとして捉えている記述も多く見られた。

本時においては、自転車世界一周というきわめて非日常的な体験を、生徒が自分事として考えられるかどうかという点に課題があったが、授業の全体を通して「うーん」、「難しい・・・」と深く考え込む生徒の姿が多く見られ、日常からかけ離れた題材だからこそ、ねらいについて深く探究することが出来たと考えられた。アフリカや南アメリカで生きる心の豊かな人びとの親切心をとらえ、彼らの行為や思いを通してそれぞれの自己の生き方を見つめ直した本時の活動は、次時で主題とする「畏敬の念」にたしかにつながる授業となった。

4.2 第二時間目「感動・畏敬の念」

第二時間目は、いよいよ本論文の主題である「感動、畏敬の念」の授業である。前時で検討した「親切、思いやり」に関する生徒の記述を想起しながら、自分を救ってくれたひとつひとつの出会いや出来事が、運命的な「何か」によってつなぎ合わされていると述べた坂本氏の思いを受け取り、そ

それぞれの生徒が「人間の力を超えたもの」に対して、自分なりに「畏敬の念」を感じることができ、授業展開を目指した。

授業の導入では、前時で使用した南米大陸のエピソードで語られる、「何かがひとつひとつの出会いや出来事をつなぎ合わせてくれている気がしてならなかった」という坂本氏の言葉にあらためて注目し、その「何か」について議論するところから開始した。「よく分からない」、「イメージできない」と困惑する生徒が大半のなか、数名の生徒から「神様か何か」、「運命のようなもの」、「坂本さんは偶然に運命を感じているだけ」といった意見が提案された。抽象的な発問による導入であったが、前時の続きとして構成したことで、生徒はすでに坂本氏が経験した旅の経過に関心を寄せており、むしろ新たなエピソードを楽しみにしているようにも見受けられた。そこで、この「何か」についてはひとまず掘り下げず、シェリフ医師とのエピソードを通して「人間は生かされている」と述べた坂本氏の思いを考えることにした。

シェリフ医師とのエピソード（資料②）を通して生徒から出てきたのは、日本での常識からはなかなか想像できない彼の行為に対する賞賛であり、そのことは、命やお金に対する生徒自身の日常の意識をとらえ返すことにつながった。「人間は生きているのではない。生かされているのだ」という坂本氏のセリフに対しては、「人間は自力だけではなく、人に助けられることで生きている」、「背後にある人びとがいて、生きることの喜びを感じることができる」、「見返りを求めない支え合いがある」といった「よりよく生きる喜び」にもつながる発言がなされた一方で、「人生には自分の意志とは関係のない出来事がある」、「人生は作るのではなく作られている」、「生きるとは、どこまでが〈生きる〉なのか」、「生きる意味を探さなければならない」といった、まさに「人間として生きることの有限性」に触れ、「人間の力を超えたもの」を想起させるような発言も多く確認することができた。こうした発言があるたびに、多くの生徒から「おお」、「深い」、「なるほど」と

いった感嘆の言葉が聞かれたことも、非常に印象的であった。

坂本氏のいう「何か」とは、いったい何であったのか。意見交換の後、最後に「ころのおと」にあらためて記述させたところ、生徒の思考には授業開始時と比べて明らかな深まりが見られた。下に示すように、ほとんどの生徒から、「生きられるというありがたみ」、「命のつながり」、「運や偶然を作る力」などといった「畏敬の念」に関連する記述を確認することができたのである。

- A 「生かされている」とは、自分自身が生まれてから死ぬまで変わらないことだと思う。自分を生かすものはきっと優しさだけではなく、本当の生かされる意味が与えられたからなのだと思う。誰かから自分は必要とされている。そう思えたらよりポジティブに、人生を送れる。
- B 私は人の人生はつくられていくものだと思う。人が助けようと思わないと助からないし、助けてもらうのは当たり前ではないので自分は今いろんな人に助けられているので感謝したい。
- C 「何か」は、人が1人1人生まれてきたときにもった使命を果たすために神様のような存在が手助けしてくれることだと思う。
- D 私は、様々な可能性が考えられると思うが、その内の一つとして坂本さんの信念や必死に生きて生き延びている姿が他の人々にも伝わっていつているのではないかなと思った。そして坂本さんも何回も生かしてもらえてきている内に、もっと成長して、その気持ちが伝わって、のループだと思った。
- E 人間が生きるための助け船になってくれているのが人と人との関わり合いだと感じた。1つ1つの出会いや出来事もその1つで人との関わり合いを大切に、その中での出来事が、運命を感じる瞬間となったのだと思う。
- F 人と関わることで自分に様々な影響が出

る。因果応報という言葉があるように、誰かが発したものは、きっと自分も含め誰かに届くのだろう。

多くの生徒は、坂本氏が感じたような、人と人をつなげ、人間を生かし、さまざまな出会いをもたらす「大いなる力」を感じ取っており、また二時間の授業を通しては、自分自身のこれからの生き方を考える思考にまでつなげることができた。このことは本実践の大きな成果であった。

4.3 授業の反省と考察

さて、学習案の作成にあたって課題としてあげたのは、第一に、従前の道徳教育が依拠してきた自然環境との対比からではなくて、人間が生きることに對して「畏敬の念」を感じ取る手立てを準備することであり、第二に、それが終始「生きることの神秘さ」を発見することにとどまり、特定の宗教に対する賞賛につながらないようにすることであった。上記の授業実践を踏まえて、この二点について考察することにする。

まず「人間の力を超えたもの」を感じ取る活動について、本授業では自然の神秘さを対象とするのではなかったが、心の豊かさに生きる人びとの生き方や、そうしためぐり合わせに感動する坂本氏自身の言葉によって、それが一定程度達成できたと考える。使用した題材は生徒の日常からかけ離れていたが、しかし授業中の発言を聞かざり、生徒自身も日常を生きるなかでさまざまな出会いやめぐり合わせの不思議を感じていたようであり、そのことが坂本氏の思いに対する共感を誘ったものと思われる。特に第二時間目において、生徒の思考はこれからの人生の生き方にまで及んでいた。ここから進路を選択していく中学二年の時期に、人間として生きることの偶然性や不思議さに関する議論ができたことは、学校生活全体に対しても良い影響を期待できるものと思われた。

また特定の宗教を想起させる危険については、本実践においては意外にもほとんど問題にならなかった。シェリフ医師の献身的な姿や、現地の人

びとの死生観を扱うなかで、生徒から宗教に関する発言が出ることも予想されたが、予備授業と本授業の全三回の実践を通してそうした議論の展開は見られなかった。その要因としては、ひとつには授業の全体を通して坂本氏自身の言葉に寄り添いながら授業を進めることができた点と、またひとつにはそもそも生徒の「宗教」に関する知識の浅さが指摘できるように思う。今回の授業ではできるだけ宗教性に触れないよう、第一時間目に「思いやり」という道徳的価値を介在させたこともまた効果的であったと言える。しかし、一方で宗教および宗教性に関する知識を生徒が共有していれば、偶然性や運命に関する議論はさらに神や神聖の概念を通してより深くとらえ返されることになり、さらに高度な議論が展開できたことは間違いない。宗教性のない「畏敬の念」がどこまで「畏敬の念」になり得るかという点は、道徳教育理論の問題としてこれから検討していく必要があると感じた。本論文の主旨ではないが、そのことは宗教的情操教育との関わりで、これからの学校教育全体の課題であるように思う。

5 おわりに

さて、本稿はここまで「特別の教科 道徳」の実施にともなって、内容項目の「自然愛護」と「感動、畏敬の念」が二つの項目に区分されたことに着目し、改訂後の授業のあり方について理論と実践の両面から筆を進めてきた。従来の学習指導要領では、「畏敬の念」の項目が「自然愛護」のなかで記述されてきたため、芸術作品や自然環境を鑑賞し、それに感動する感性を育てるものとして扱われがちであった。対して本実践は、それが新たに「人間」の側に引き戻された今回の改訂にもとづいて、人の生き方や出会いに「人間の力を超えたもの」を感じ、それに「畏敬の念」を感じるための授業実践を試みた。自転車世界一周の旅に出た坂本達氏の「サムシング・グレート」に対する思いを教材に選んだことで、実践を通しては、ひとりひとりの人間が目に見えないさまざまな連

環のなかで生きているという、まさに「人間の力を超えたもの」の部分にまで生徒の思考を導くことができた。「畏敬の念」がすなわち自然に対する感性であるという従来の境界を突破したことは、本研究の大きな成果であり、そのことは宗教的情操教育の視点からも今後の大きな展開可能性を感じさせるものとなった。

一方、本実践を通して明らかになったのは、この「畏敬の念」という価値項目がきわめて抽象的で理解の難しい概念であるために、十分な時間をかけて学習する必要があることである。本実践では、第一時間目のねらいを「親切」としながらも、二時間を通して「畏敬の念」の理解につながるように全体の授業を構成した。登場人物の人間愛に多くの生徒が圧倒された第一時間目の実践がなければ、生きることの偶然や運命についての第二時間目での発言を導き出すことは困難であったと予想する。抽象的な価値項目だからこそ、わかりやすい価値との連続および対比で学習をおこなうことが効果的であり、その連続性を考えるなかで、生徒の思考がより深い次元に到達するということが明らかになった。

最後に、本論文を通して見えてきた課題を二点示しておきたい。第一には、道徳科の授業を実践するにあたっての教材の選定についてであり、第二には、学校教育全体に視点を移し、現在の学校教育における「人間の力を超えたもの」とのかかわりについてである。

今回の実践では、あえて教科書を使わずに坂本氏の著作を教材に選び、ねらいに合った充実した授業を展開することができた。しかし、膨大な著作の内容をねらいに向けて精選し、三つのエピソードを抽出する過程はとても容易な作業ではなかった。今回の実践を通しては、教師による教材の選定および精読が授業の質を格段に向上させることが証明されたものの、しかし日々の業務に多くの時間を割かれる状況で、教師が相当の熱量をもって教材を作成することには、そもそも物理的な制約が大きい。教科書では「畏敬の念」が「自然」に限定されていたため、今回の主題を教科書

の教材で実践することは困難であったが、しかし検定教科書が導入されたことで、自主教材を使用することに制約がかかってくる可能性にも、注意しなくてはならない。教科書の内容を学習指導要領とのかかわりであらためて吟味することや、また自主教材との併用可能性など、その効果的な活用方法については今後のさらなる検討が必要であると考えている。

さらに今回の実践を通しては、「サムシング・グレート」について考えた第二時間目の経験に、生徒がかつてない新鮮さを見だし、初めての経験のようにとらえていた事実が非常に気になった。このことは、日常的ではない主題を考えるための機会を作った本実践の意義をたしかに証明するが、しかし裏を返せば、生徒が「人間の力を超えたもの」を考える活動を「新鮮」に受け取るということ自体が、学校教育のある種の問題性を露呈しているように思われた。

たとえば近年の実存主義教育学の動向は、教育が正解の決まった知識の伝達だけではなくて、人間が生きることの神秘性や成長の不思議さを含み込むべきことを問うてきたが、しかし実際の中学校の現場ではいまだ試験勉強や客観的知識の探究が主であり、本実践で扱った「人間の力を超えたもの」や「畏敬の念」は、生徒にとってその意味で異質なものとして受け取られたようである。本論文においてもまた、坂本氏の旅は「きわめて非日常的な経験」であるとして論を進めてきたが、しかし自らの感性を研ぎ澄ませてみれば、われわれの生活は、一方でこの「きわめて非日常的で奇跡的な体験」に溢れている。それを些細なものとして通り過ぎるか、あるいは自己の実存の転機として受けとめるかは、ひとりひとりの生き方そのものに懸かっている。今回の実践を特異なものとするのではなく、日常的にこうした非日常的なものとの出会い、「人間の力を超えたもの」に触れる機会を摘み取っていくことが、むしろこれからの学校教育の課題であるのではないかと考えた。こうした機会を作るためにも、引き続き道徳科授業の在り方を模索していきたい。

資料① 南米（チリ・アンデルセン）1999年4月～5月

世界一周を締めくくる最後の大陸だ。(略)

標高四〇〇〇メートルを前後しながら、アカシアと固い草だけが生える不毛の大地をひたすら走った。

信じられないことに、昼過ぎから頭痛とめまいに襲われた。もしかして、高山病？吐き気がし、食欲もなくなり、やがてひどい倦怠感からペダルがこげなくなってしまった。自転車にまたがっているのでさえ辛い。「ふーっ、どうしたらいいんだろう」

無理をすると呼吸困難や意識不明になり死に至る。ここまで強い追い風によって進んできたが、風に逆らって戻る気になれないし、水があるといわれた十キロ先まで行ってみてもそこに水があるという保証はどこにもない。交通はゼロ。誰も通らない。

もしこのまま時間だけが過ぎていったら、いつ、どうやって僕は発見され、どのようにして、日本に知らされるのだろうか。遺品はどうやって処分されるのだろうか。なんて弱気になり、知らず知らず思考が「死」について流れていく自分に気づき、首を振って我に返る。

絶望的な思いで道ばたに張ったテントに入ろうとした時、峠から砂煙を巻き上げて一台のピックアップ・トラックが向かってきた。ヨロヨロと駆け寄って運転手に助けを求める。

「国境警備隊のところまで連れて行ってあげよう。酸素ボンベがある。」「た、助かった！」

ピックアップに自転車を積んでもらい助手席に乗り込むと、男はアスピリンをくれた。男は来た道を国境警備隊のところまで戻ってくれた。隊員たちは男に敬礼をする。男は、「この日本人の面倒をしっかりと見るように」と命じ、僕には名刺をくれた。その肩書きはチリ第二州の知事だった！命の恩人は州知事だった。来た道路を舗装するための視察に来ていたとのこと。そして、何事もなかったかのように来た道を下っていった。まるで映画のワンシーンを見ているようだった。

「天は味方してくれた。」そうとしか思えなかった。少し前までは強風で身動きがとれず、思考も働かず、飲み水も残り少ない絶望的な状況にあったのに、今は人がいる暖かな建物の中でココ茶を飲んでいる。こうして普通に命があることが不思議でならなかった。

二泊させてもらい、丁寧にお礼を言って二五キロ先の国境へ。頭痛は残るが気分は悪くない。二七〇キロ先のサルタを目指して峠を下り始める。途中の村で知り合ったおばさんに紹介された民宿に転がり込み、十日ぶりの温かいシャワーを浴びた。幸せだった。不思議なことに僕が高山病のことは全く口にしていないのに、「大変だったわね」「辛かったですよ」と家族がねぎらってくれる。お茶やお菓子も出してくれるし、洗濯もしてくれた。あまりの居心地の良さに五泊もしてしまった。宿代を払おうとしたら半分も受け取ってもらえない。本当はもっと甘えていたいが、これ以上お世話になると、本当に出発するタイミングを逃してしまう。

自転車を外に運び出すと、十八歳になる親戚の少年が友人四人を引き連れて、自転車で見送りに来てくれていた。街を出るまでは道に迷いやすいからと、二十キロ以上も伴走してくれたのだった。みんなの深い思いやりが目にしみる。どうして人はこんなに親切になることができるのだろう。

高山病のこともあり、しばらく自転車にはまたがりたくないと考えていたが、気分を入れ替えて新たなスタートを切ることが出来たのは、あの家族のおかげだ。あの巡り合わせなしには僕はしばらく再スタートを切ることが出来なかっただろう。

改めて不思議だったのが、「なぜ必要なタイミングで、必要な助けが現れるのか」ということだ。たまたま通りがかった州知事は、僕が倒れた前日でも翌日でもなく、あの日あの時に通ってくれた。サルタでは、「しばらく人に会わず、ずっと寝ていたい」と思っていた僕に、家族同様に接してくれる人を紹介してもらえた。「ひとりでは何もできない」と実感すると同時に、何かがひとつひとつの出会いや出来事をつなぎ合わせてくれている気がしてならなかった。

資料② アフリカ大陸（ギニア・カリヤ村）1996年7月

熱っぽかった坂本さんがギニア人医師のシェリフのところで休ませてもらっていると、目の前に発熱などの症状で苦しんでいる三歳の男の子が母親と来院しているところであった。

「マラリアだよ」シェリフは平然と言う。

もう一つの病室を覗くと、大人が二人横たわっていた。彼らもマラリアだという。

外に出てシェリフと並んで座った。

「アフリカではマラリアや赤痢で死ぬ人が一番多いんだ」とシェリフは言った。(略)

毎日「命」に直面している人間を前に、思い付きのことを言う勇氣も何かを提案する知識もない。僕は斜め前にグツリと地面に座っている女の子に視線を向けた。十五、六歳だろうか。(略)

本当にみんな死と隣り合わせで生きているんだ。日本では、病気になれば病院があるし、薬も手に入る。きれいな飲み水もある。僕は、たまたま日本という豊かな国に生まれたことを、ある意味後ろめたく思っていた。

僕は変わらず、熱っぽく、気分もすぐれないので、まずいな……とは思っていたが、日没後ひどい下痢が始まった。そして、わずか一時間で、熱が一気に三九.五度まで上がった。発汗が始まり、悪寒が続いた。

—マラリアだ。

隣の診察室のシェリフに伝えると、やはりマラリアだという。悪寒は三十分ほど続いた。ありったけの毛布を被ったが、体が骨から震えて仕方がない。おさまったかと思うと、今度はだらだらと汗が流れ始めた。どんだん力が抜けていく。(略)

便を朝になってから見ると、鮮血が混ざっていた。頭のとっぺんまで鳥肌が立って、冷や汗が出た。
—マズイ、赤痢だ。併発してしまった。これは長引くかもしれない。

シェリフは「注射を打とう」と言ってきた。現地の医者なので信頼して打ってもらった。

それから、丸三日たっても、滝のような下痢と血便は止まらない。昼夜を問わず、目が覚めると枕がびっしょりと汗でぬれている。

シェリフはずっと手持ちの薬を飲ませてくれていた。残り少ない薬のストックを見ながら、「マラリアの注射はどれ？」と聞くと、「ないよ」と言う。「え？じゃあどうやって僕を治したの？」と聞き返すと、「タツに打ったのが最後だった」という。僕は、一瞬訳がわからなかった。最後の薬？もしその薬がなかったら？村人がマラリアになったら？シェリフは朝晩三日間、当たり前のように注射を打ってくれていたが、村の最後のアンブルを僕のために使っていてくれたなんて……。本当に申し訳なかった。

シェリフや近所の人々の献身的な看病のおかげで、僕は少しずつ外に出たり、冗談を言ったりすることができるようになった。八日目、不足している薬を分けてもらい、最後の洗濯も済ませ、出発の準備をする。自転車整備と旅支度を終え、シェリフにお金を渡そうとした。治療費、薬代、宿泊費、食事代、そして感謝の気持ち。しかし彼は、「俺の国にいる間は、俺たちが面倒を見るといっただろう。金の問題じゃないんだ。それにお前は友達だ。友達から金はもらえない」と、頑として受け取らない。僕は、二歳しか変わらない、彼の人格に圧倒された。

九日目、いよいよ出発だ。

僕はベダルをこぎ続けた。そして、強く思った。

「人間は生きているのではない。生かされているのだ」と。

資料③ アフリカ大陸（カメルーン）1996年6月～8月

村に着いて五日後。お世話になった家族に別れを告げて、コンゴ共和国へ向かう。国境の川に向かうには渡し船に乗らなくてはならないが、あいにくその日は舟が出てしまっていた。次の舟は、明日か明後日だという。出発が遅びてしまったがこれもまた旅。

舟を待つ人の中に、背が高く体格のいい男がいたので気になっていた。この辺りの住民ではなさそうだ。男は僕の視線を感じたようで、こっちにやってきた。

「やあ、僕はカメルーンのカメルーン代表でサッカーをしていたが、オーナーが横領事件を起こして解散してしまったんだ。だからこれから国境を越えて、新しいチームを探しに行くところだ」と淡々と言う。「どこまで行くの?」と聞くと、「コンゴ共和国を越えてアンゴラに行く。チームを見つけるのが難しいことはわかっている。ダメだったら南アフリカまで行くよ」と言った。この男も夢を追っている。どこにも何の宛もないのに。さらに彼は続けた。

「ここに来る途中で弟が強盗に遭い、金も荷物も全部やられた。今パスポートの申請に行っているから、弟が戻ってきたら一緒に出発する。ところでお前、何か食べ物はあるか?」

(続き)

同情させておいて、貴重な食料をせびりに来たと思い、僕はそっけなく、「もうほとんどない」と答えた。この先いつ食料を入手できるかわからない状況で、そう簡単にあげることはできない。すると彼は残り少ないパンとチーズを取り出して、人に見られないようにこっそりと僕に差し出した。「食べ物無いんだろ。」僕は息が止まるほどびっくりし、断ることも忘れてそのまま受け取ってしまった。死ぬほど恥ずかしかった。僕は彼が持つ何倍もの食料を自転車に積んでいる。助けが必要なのは僕ではなく、彼の方ではないか。それにチーズといえばアフリカでは高級品で、僕でさえ買うのに躊躇するような代物なのだ。自分は一体何をやっているのだろう……。

註

- 1 『中学校学習指導要領』（平成27年一部改訂）、第三章「特別の教科 道徳」を参照。
- 2 中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」2014年10月31日。
- 3 改訂されたのは、第一に「それぞれの内容項目に手掛かりとなる「自主、自律、自由と責任」などの言葉を付記した」ことであり、第二に、「これまで「1 主として自分自身に関すること」「2 主として他の人とのかかわりに関すること」「3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の順序で示していた視点を、生徒にとっての対象の広がり即して整理し、「A 主として自分自身に関すること」「B 主として人との関わりに関すること」「C 主として集団や社会との関わりに関すること」「D 主として生命や自然、崇高なもののかかわりに関すること」として順序を改めた」こと、の二点である。『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』文部科学省、

平成29年7月、5頁。

- 4 このことについて解説は、「より体系的・系統的に指導ができるよう」にするための「改善」として記述する（同上、6頁）。しかし、当該箇所に限らず、すべての改訂箇所と同様の文言が繰り返し示されており、改訂の具体的な意図やねらいは十分に説明されていない。
- 5 同項目の解説には、指導の手立てについて次のように示される。「指導に当たっては、自然や、優れた芸術作品等美しいものとの出会いを振り返り、そこでの感動や畏怖の念、不思議に思ったこと等の体験を生かして、人間と自然、あるいは美しいものとの関わりを多面的・多角的にとらえることが大切である。また、自然を愛し、護るといった環境の保全を通して、有限な人間の力を超えたものを謙虚に受け止める心を育てることが求められる」（文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年7月、52頁）。
- 6 註5を参照。「人間の力を超えたもの」が、あくまで自然との関わりを通して感じられるものとされていた点が本稿にとって重要である。
- 7 同上、66頁。

- 8 同上, 67頁。区分された20「自然愛護」の項目にほとんど同様の記述がみられることも、その区別のあいまいさを助長している。
- 9 そもそも要領がいったいいかなる理論を基盤としてこのような説明をしているのかという点については明らかにされず、このことは「道徳の時間」特設以来の大きな問題であるように思う。
- 10 なお改訂前（平成20年）の文言は、「人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める」であった（註5）。
- 11 文部科学省発行の副読本『私たちの道徳』（2014年発行）は、この棲み分けをもっとも顕著に採用している。
- 12 学習指導要領解説（註3）、68頁。
- 13 同上, 69頁。
- 14 この点に関しては、道徳教育の内容項目として「畏敬の念」という概念が提案された経緯を検証することで、より具体的に把握することができる（この点については、山田真由美「高坂正顕における超越と人間の問題―「生命の根源に対する畏敬の念」についての考察」（『道徳と教育』第333号, 2015年）にまとめた）。このことはさらなる検討を要するが、今回「畏敬の念」が「自然愛護」と区分されたことは、自然や美しいものに対する感性にとどまらない、人間が生きることそのものの根源的な謎（絶対無）に迫る経験を強調した「期待される人間像」（中央教育審議会, 1966年）との親和を感じさせる。
- 15 ただし、自然や自然現象の荘厳さを超えて人間の側に「畏敬」を求めることは、ある意味で宗教や宗教的情操との密接な関わりを想起させる。こうした観点からすれば、教科化に際して内容項目に関する議論が十分になされないのは、やはり問題である。
- 16 このことは本稿の趣旨ではないが、各教科書会社が今回の改訂をどのように理解し、各内容項目をどのように改題したかという点を精査することも、道徳教育のあり方をめぐって検討すべき重要な課題であると考ええる。
- 17 自主教材を使用する際に十分に気をつけなければならないのが、それが中学校道徳の教材としてふさわしいかどうか、という点にある（教材の要件については学習指導要領解説の106-108頁を参照した）。本実践においては、坂本氏が「関西・こころの賞」（2006年）をはじめ社会貢献活動に関する複数の賞を受賞している点、坂本氏の活動が内閣府主催の青年国際交流事業においてナショナル・リーダーとして認められている点、そして彼の著書『ほった』の題材が2004年度より高等学校英語（増進堂）の教科書に採択されている点から、同教材が教育現場に十分に相応しいものと判断した。なお、教材の使用にあたっては著者の坂本氏ご本人に

問い合わせ、承諾をいただいた。

- 18 坂本達『ほった。―4年3カ月も有給休暇をもらって自転車で世界一周し、今度はアフリカにみんなで井戸を掘っちゃった男』三起商行, 2006年, 51-60頁の記述を抜粋して要約。
- 19 同上, 89-103頁の記述を抜粋して要約。
- 20 「こころのおと」とは、本校が道徳科の授業で毎時間使用している振り返り用のシートである。授業の最後に、必ず生徒が自分の考えを書く時間を確保し、「特別の教科」となった前年度からは評価にも活用している。

（山田真由美 札幌校講師）

（杉本 泰範 附属札幌中学校教諭）

（山田 浩之 附属札幌中学校教諭）

（小路 美和 附属札幌中学校教諭）

学習案Ⅰ

第一時間目 (内容項目 B (6) 思いやり・感謝)

ねらい 坂本氏が為しとげた自転車世界一周の旅を想像しながら、それを支えた人々の、無償の人間愛や他者を思いやる気持ちの尊さを見つめる。

時間	学習活動 (●は予想される生徒の反応や生徒の活動、□は教師の働き掛け)	留意点
10分	<p>□坂本氏と坂本氏が成し遂げた世界一周の旅の行程やエピソードを紹介する。(動画を用いて、追体験できるように紹介する)</p> <p>□坂本氏の行った世界一周について、感じたことを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 食料や水も十分に手に入らず大変そうだ。 ● 伝染病の心配もあり、できなことではない。 ● 大変な道で、舗装道路でもないのが大変だ。 <p>□カメルーンのサッカー選手との出会いのエピソードを範読し、自転車には食料は十分に積んであるが、いつ入手できるかは分からない状況であったことを補足説明する。</p> <p>[基本発問] 自分が持っている食料をあなたに分け与えるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自分の考えに従い、どちらにすべきか考え、ネームプレートを黒板に貼る。 ● (分け与えない) どの人か分からないし、不安 本当なら見捨てておけない 自分の身が心配 <p>□その後のエピソードを範読し、逆に現地では高価な食料をもらったことを説明する。</p> <p>□1999年南米大陸でのエピソードを範読する。</p> <p>[中心発問] 坂本さんが出会った人たちは、「どうしてこんなに親切になれるのだろうか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 坂本さんの旅を理解し、協力したいと思ったから。 ● 異国の地で大変な状況を理解し、寄り添ってあげたいと思ったから。 ● 自分たちも助け合って生きているから。 ● 自分たちの生活している土地を受け入れて欲しい。 など <p>[補助発問] 自分自身は多くの人々に親切にしているだろうか。</p> <p>□このころのおとに感じたことを整理するように促す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒にとっって身近な話ではないが、想像力を働かせ、追体験できるように促す。 ・生死に関わる重大な選択になり得ることを、導入とのつながりから掴めるようにする。 ・自分の身に置き換え、自分ならどうするかを考えるように促す。
25分		
33分		
45分		
終末		
50分		

ねらいに対する実現状況の見取り

坂本氏の旅を支えた多くの人々の無償の人間愛を見つめ、他者を思いやる気持ちの尊さを見いだすことができたか、話し合いの様子や道徳シートの記述内容から見取る。

学習案Ⅱ

第二時間目 (内容項目 D (21) 感動、畏敬の念)

ねらい 坂本氏の旅を支えた多くの人々の行動の気高さを見つめ、人間の力を超えて人間を生かす「何か」について考える。

時間	学習活動 (●は予想される生徒の反応や生徒の活動、□は教師の働き掛け)	留意点
7分	<p>□地図を用いて、前時を振り返るように促す。</p> <p>□前時に記入したところのおとの記入を紹介する。</p> <p>□1999年南米大陸でのエピソードを振り返り、導入発問を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● イメージできない ● たくさんの人の温かさを感じたから ● 偶然にしてはできすぎているような不思議さ <p>□1996年7月アフリカ大陸ギニアでのエピソードを範読する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 命を救うという医師としての姿勢だけでなく、友としての誇りや気高さを感じたから。 ● 人間としての尊さが感じられたから。 ● 思いやりを超えた人としての素晴らしさ 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の動画や資料を思い起こし、旅を追体験できるように促す。 ・授業後に姿勢を感じ取れるようにするために発問であるため、想起できない生徒がいても無理に考えさせない。
20分		
30分	<p>[中心発問] 「人間は生きているのではない。生かされているのだ」とは、どのような思いから出たことばなのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 素晴らしい人々の尊い行為によって、今ここにあるのだという実感。 ● 過酷な大地の中では、多くの人が互いに互いを尊重し、寄り添って生きていかなければならないという思い。 ● 自分の旅を救ってくれた人々へ恩返しをしなければならぬという使命感。 <p>[補助発問] 「何か」とはどのようなものだろうか。</p> <p>□「何か」とはどのようなものであるかを考え、このころのおとに記述するように促す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・宗教的な思いで促せるのではなく、人間の生き方の美しさに注目できるように促す。 ・「何か」を追究していくことで「人間の力を超えたもの」に気付くことができるように促す。
45分		
終末		
50分		

ねらいに対する実現状況の見取り

坂本氏や坂本氏の旅を支えた多くの人々の行動の気高さを見つめ、畏敬の念を感じることができたか、話し合いの様子や道徳シートの記述内容から見取る。